

茶道の魅力を伝えるために

京都市立西京高校附属中学校3年（京都府）

重村 花

私が茶道と出会ったのは保育園の年長の時だった。扇子を身体の前に置いてお辞儀をしてお茶室に入る。そしてお菓子とお抹茶をいただくのが毎週金曜日の楽しみだった。あのあたたかい雰囲気を出し、茶道をすることを決心したのは中学1年生の時だった。

体験入部で立礼のお点前をする3年生の先輩の凛々しい姿を見たとき、こんなお点前ができるようになりたい、と思うと同時に私にも素敵なお点前ができるか不安になった。それでも保育園の頃大好きだったあのあたたかい雰囲気を誰かに届けたいという思いが私を動かした。

実際に茶道のお稽古を始めると、私の想像よりもはるかに奥が深く、細かい作法に苦戦することが多かった。しかし、先生や先輩、後輩などがいたから諦めずに、そして楽しみながらお稽古ができた。振り返ってみれば、お稽古の中には必ず笑顔があった。綺麗に帛紗をさばけたという成功だけでなく、慣れない正座にみんなで足をしびれさせたという失敗も私たちを笑顔にしていた。これらはどれも素直に茶道と向き合っていたから生まれた笑顔だったように感じられる。お稽古中の笑顔を思い出すたびに茶道の伝統を感じる。900年も受け継がれてきたのはまっすぐに茶道と向き合い、そして常に向上心をもって茶道と向き合う人がいたからだと思ふかされる。私はこの茶道の伝統をお点前や日々の練習でつなぎたいと思うとともに、お客様の笑顔を作りたいと思う。私にとってコロナ禍でのお客様の笑顔を見ることが出来る機会は文化祭で家族にお点前をすることのみだった。しかし今年からは家族だけでなく、様々な方にお茶を点てることのできる環境になり、部活でもALTの先生方をお招きしてお点前をする機会が出てきた。茶道の静寂とあたたかさが融合しているという魅力を伝えるためにはどうすればよいのだろうか。最も大切なのはお点前を完璧にすることでも共通語を使いこなすことでもなく、お客様を信頼すること、そして亭主自らがお点前と真正面から向き合うことだと考える。これは素直な心でお互いを尊重することが相手とよりよい関係になるために最も大切だという考えからだ。静寂の中で心のコミュニケーションを楽しみ、亭主らとお客様のお互いの「思いやり」を感じてもらいたい。「和敬清寂」という言葉に「静」ではなく「清」が使われている理由でもあると思う。互いが信頼しあい、お点前と向き合う環境を作るために今の私がすべきことは、ひとつひとつの動作に隠されている思いやりを知ること、受け継がれてきた思いやりをお客様に伝えるために自分なりの工夫をすることだ。

改めて私にとって茶道の一番の魅力は「人と人を結び、それぞれをあたたかい気持ちにさせてくれること」だ。茶道の魅力は茶道を楽しむ人の数だけあるだろう。私の感じる茶道の魅力を発信し、さらに未知の魅力を知りたい。そのために必要な心と技術を身につけるため今日もお稽古に励む。